北朝鮮人権侵害問題啓発週間

作文コンクール2022

入賞作品集

1日も早い拉致被害者全員の救出にむけて!

主 催 | 政府拉致問題対策本部　後 援 | 法務省、外務省、文部科学省

北朝鮮人権侵害問題啓発週間

作文コンクール2022

入賞作品集

1日も早い拉致被害者全員の救出にむけて！

主催　政府拉致問題対策本部　　後援　法務省、外務省、文部科学省

北朝鮮による拉致問題は、我が国の主権や国民の生命と安全に関わる重大な問題であり、日本政府は、全ての拉致被害者の一日も早い帰国を実現すべく、政府一体となって、総力を挙げて取り組んでおります。

同時に拉致問題の解決のためには、日本国民が心を一つにして、全ての拉致被害者の一日も早い帰国実現への強い意思を示していくことが重要です。政府としては、拉致問題に関する啓発活動にも力を入れて取り組んでおります。特に、これまで拉致問題に触れる機会の少なかった若い世代への啓発が重要な課題となっています。

かかる観点から、政府拉致問題対策本部では全国の中高生を対象に、拉致問題関連の映像作品や舞台劇の視聴、拉致問題関連書籍の読書等を通じて拉致問題を知ってもらい、拉致被害者やその御家族の心情を理解するとともに、拉致問題解決のために自分に何ができるのか、何をすべきかについて深く考える機会としていただくことを目的として、北朝鮮人権侵害問題啓発週間作文コンクール２０２２を実施いたしました。また、昨年度から、作文コンクールに積極的に参加している学校を対象に団体賞を設けております。

最優秀賞、優秀賞の受賞者に拉致現場を視察いただき、十二月十日に行われた表彰式では最優秀賞受賞者の二名から視察時の感想を発表していただきました。

この度、応募された二六三五作品の中から、入賞作品を文集にしましたので、是非、ご一読いただけますと幸甚です。

令和五年一月

政府拉致問題対策本部

作品総数

全 2,635作品 ［ 中学生部門 1,602作品 ／ 高校生部門 1,017作品 ／ 英語エッセイ部門 16作品 ］

最終審査委員

北朝鮮による拉致被害者家族連絡会
横田 拓也 代表

株式会社毎日新聞社
松田 喬和 客員編集委員

ニューヨーク大学
ロバート・ボイントン 教授

神戸大学
ルックス・ジョン・マシュー 准教授

中部大学
キング・グレゴリー 教授

法務省
柴田 紀子 大臣官房審議官

外務省
實生 泰介 アジア大洋州局審議官

文部科学省
寺門 成真 大臣官房学習基盤審議官

内閣官房拉致問題対策本部事務局
平井 康夫 内閣審議官

表彰式の模様（2022年12月10日、東京都千代田区イイノホール）

目次

団体賞 5

中学生部門

最優秀賞 「ただいま。」という声が聞きたくて 吉田 姫愛 千葉県習志野市立第五中学校 一年 8
優秀賞 自分事として捉えて 川勝 梨世 京都府南丹市立園部中学校 三年 9
優秀賞 もしも私だったら～拉致問題～ 上田 華凛 東海大学付属高輪台高等学校・中等部 一年 10
特別賞 世界中の中学生のみなさんへ 木田 モニカ 東京都立川市立立川第七中学校 三年 11
特別賞 今を大切に 金子 由紅 山梨県北杜市立甲陵中学校 二年 12
特別賞 話し合う努力が大事 勝山 心咲 愛知県名古屋市立瑞穂ヶ丘中学校 三年 13

高校生部門

最優秀賞 一人ひとりの人権 松本 優心 関西創価高等学校 三年 16
優秀賞 「忘れてはいけない」 佐藤 陽和 福島県立福島明成高等学校 三年 17
優秀賞 関心をもつことが第一歩 中川 茜莉 神奈川県立厚木東高等学校 一年 18
特別賞 自分事としての「出会い」 生井澤 龍青 敬愛学園高等学校 一年 19
特別賞 北朝鮮拉致問題について 真鍋 輝也 尽誠学園高等学校 一年 20
特別賞 拉致問題について 野中 こころ 愛媛県立松山商業高等学校 二年 21

英語エッセイ部門

最優秀賞 What we should do now? 竹内 麻結 愛媛県立西条高等学校 二年 24
優秀賞 Familiar Problems 白濱 昌明 徳島県阿南市立福井中学校 三年 25
優秀賞 Now, it is our turn 村山 夏帆 呉武田学園 武田高等学校 一年 26

団体賞

昨年度より、本作文コンクールに積極的に参加している学校を対象に団体賞を設けております。
今年度、団体賞を受賞されました学校は左記のとおりです。

佐賀県鳥栖市立鳥栖中学校
福岡県行橋市立中京中学校
京都府南丹市立園部中学校
瀧野川女子学園中学高等学校
熊本県立岱志高等学校
愛媛県立今治北高等学校
徳島県阿南市立福井中学校

中学生部門

最優秀賞

「ただいま。」という声が聞きたくて

千葉県習志野市立第五中学校　一年
吉田　姫愛

「いってきます。」その言葉を最後に、一九七七年十一月十五日、今から約四十五年前、当時十三歳の横田めぐみさんが、中学校の下校途中、行方不明になった。アニメ「めぐみ」、劇団夜想会「めぐみへの誓い」の視聴が、私に拉致問題について深く考えるきっかけをくれた。私と同じ年のめぐみさんが拉致されていたことを知り、北朝鮮拉致問題の悲惨な実情を目の当たりにして、他人事ではいられなくなった。胸がしめつけられるくらい苦しかった。突然、家族や友人との幸せを奪われ、北朝鮮での生活を強いられた。めぐみさんの気持ちを考えると、言葉に出来ないほど、心が痛んだと同時に、私は、改めてたくさんの幸せにあふれた生活をしていると感じた。毎日、当たり前のように学校へ行ける幸せ、温かいご飯が食べられる幸せ、好きな洋服が着られる幸せ…。こんなにもたくさんの自由と幸せに満ちあふれている。自分が当たり前だと思っていた小さな幸せが、実は何より大きな幸せだったということを学んだ。だから、日々の何気ない生活を大切にし、過ごしていくこと、それが中学生の私にもできることなのかもしれない。

他に、拉致問題を風化させないために私たちができることは何だろうか。この問題を未来に引き継ぐために、ＤＶＤの視聴を学校でする。インターネット社会の今だからこそ、国内外の人にも情報を発信して、理解を深めてもらう。また、今回のように、私のような国の未来を担う世代が作文を書き、拉致問題の実態を知る、そしてそれを後世に伝えていく。私はそれらを心がけていこうと思う。

世界には、悲しいことに拉致問題以外にも様々な人権侵害がある。最近では、コロナウイルス感染者に対する偏見や差別も耳にしたことがある。身近なことで言えば、心ない言葉で人を傷つける人権侵害もある。どんな人権侵害も、決してあってはならないことだ。だから、私も、友達、クラスメイト、家族に対する言動に気をつけていきたいと強く思った。

私が視聴した「めぐみ」というＤＶＤの中で、こんな印象深いセリフがあった。めぐみさんの母、早紀江さんが言った次の言葉だ。

「私たちは北朝鮮に住む一般市民の人を憎んだり恨んだりしている訳ではありません。ただ親として今も北朝鮮に囚われの身となっている娘を助け出したいだけなのです。」

とても悲しく辛い状況であっても、このような言葉が言える心の強さに深く感動した。

父、滋さんは悲しくも、めぐみさんとの再会を果たせずに、二年前にこの世を去ってしまった。今、めぐみさんの家族、日本国民が聞きたい言葉、それは、めぐみさんの「ただいま。」という明るい声だ。そんな明るい未来を心の底から待っている。

入賞者のコメント

拉致問題を風化させない為に、自分にできることは何かを今後も考えていきたい。人の命には限りがあるので、一日も早く拉致問題が解決することを願う。

優秀賞

自分事として捉えて

京都府南丹市立園部中学校 三年
川勝 梨世

「お母さんお父さん助けて…。私はここにいる…。」

今から四十五年以上前の秋、新潟に住む一人の女子中学生が部活動後の下校途中に拉致された。船に乗せられ、着いた先は北朝鮮。家族や友達には会えず、反抗すれば殺されるかもしれない状況。来る日も来る日も日本に帰ることを夢見て、遠く離れた家族も友人もいない土地で懸命に一日一日を過ごす。突然幸せな毎日を奪われ、知らない土地にぽつんと立ちすくむしかない。明日を生きることができる保証は何もないのだ。

「もしも、自分だったら…。」

社会科の授業で横田めぐみさんが拉致された事件を題材にした映画「めぐみへの誓い」を見た。私と同じ中学生。私と同じように父と母と弟と暮らしていたのに…。そんな彼女が、荒波で揺れる船内から「助けて」と声を枯らし泣き叫び、助けを求める痛烈な描写が今でも私の心に深く刻まれている。自分と彼女の姿が重なって見えて、胸が張り裂けそうになり苦しかった。私の想像を絶するほどの不安と恐怖を彼女は体験しているに違いない。突然、子を引き離され、失踪した子の親とされた横田さんご夫婦の心情は、言葉では表わすことができないほど辛くて悲しいことだ。

私は「拉致問題」について知ってはいた。思い返せば、この人権問題に触れる機会はいくらでもあった。しかし、

「そんな問題があったんやなぁ…。」

と、自分には関係が無いこと。まるで他人事かのように捉えていた私が確かにそこにはいた。授業を通して、仲間と人権について考えている中で、そんな過去に抱いていた自分の感情に気づいた。関心を持たないことは、本当に恐ろしいことであることを実感した。拉致問題が未だに解決していないのは、かつての私のように日本人でありながら、問題の本質に目を背けてしまっている人が多いことが最大の問題ではないだろうか。

授業で仲間と意見共有をした際にテーマとして設定されていた「歴史を正しく知って自分で考える。」これは、私たち中学生に今、一番求められていることであると感じる。

拉致問題において一番深刻であるのは、長期間に渡り問題が壁にぶつかってしまっていること。結果として、被害者をはじめご家族の方も高齢化が進んでしまっていること。そして、返還を要求する活動が衰退し、問題が風化しつつある危険に陥っていることだ。

国家間の問題として、目を背けるのではなく、アンテナを高く張り、自分事として捉える。中学生の私は、非力さに気づき、自分の存在をちっぽけに感じるかもしれない。それでも私は、歴史を正しく学び、問題の早期解決に向けて働きかける国民の一員としての役割を果たし続ける。

入賞者のコメント

この問題の早期解決のためには、「知る」だけではなく一人一人が「考える」ことが大切です。今後も自分にできることを実行していこうと思います。

優秀賞

もしも私だったら～拉致問題～

東海大学付属高輪台高等学校・中等部 一年
上田 華凛

私は、普通の中学生。横田めぐみさんが北朝鮮に拉致された当時の年齢、学年も同じである。中学校に入学して生活にも慣れて、友達も出来て楽しく学校に通っているのに、もし拉致をされたらと考えたが、想像がつかない。「行ってきます」が最後の言葉になるなんて、まずないからだ。

自分の意志とは関係なく、知らない国に知らない人に、何も分からないまま連れて行かれる。大切な家族や友人と引き離されてしまったら、辛すぎて、精神を病んでしまうかもしれない。私の大切な日常が壊されてしまうからだ。

北朝鮮が横田めぐみさん達を拉致した理由を調べると、日本人に身分偽装するためや、完璧な日本人に仕立てるための教育係にするためだと言われている。そのようなことのために、一人の人生を簡単に奪っていいのだろうか。いい訳はない。

世界中の多くの人は、生まれたときから自分らしく生きる権利＝「人権」を持っている。これは、一九四八年に宣言された「世界人権宣言」にも明記されている。しかし、拉致事件では、この人権が拉致被害者のみならず、被害者の家族までもが侵害・奪われてしまっている。被害者の命や安全も重要なのだが、家族の自由も奪っているのだ。

北朝鮮拉致問題は、私の世代では知っている人は多くない。以前の私のように、北朝鮮に拉致された人がいるんでしょ?位かもしれない。国家レベルの話なので、他人事になってしまう。でも、今回のアニメ「めぐみ」をきっかけに私にでも出来ることが大きく三つあるのではないかと考えた。一つ目は、署名活動に参加することや、身近な友人と話すこと。アニメをユーチューブで見たので、休み時間に友人と観ることもいいかもしれない。それなら、すぐに出来る。

二つ目は、正しい情報を選び、知っていくこと。普段の生活に生かすこと。人権が当たり前に認められているこの国で育っているからこそ、その内容をもう一度勉強したい。勉強をすることで、北朝鮮に住む方に対し、勝手に憎悪や偏見を持たないようになるかもしれない。もしかしたら彼らも人権を奪われているかもしれないからだ。

三つ目は、一刻も早く拉致問題が解決して笑顔が増えることを願い続けること。

私のような中学生が出来ることなんて、たかが知れているかもしれない。けれど、これを続けて過ごし、自分が母親になったら自分の子供に伝えていきたいと思う。

入賞者のコメント

作文を書くまで、拉致・人権問題について何も知らない事を痛感しました。作文を通じて、同世代の方が考えるきっかけになれば嬉しいです。

特別賞

世界中の中学生のみなさんへ

東京都立川市立立川第七中学校 三年
木田 モニカ

歳は違えど、同じ中学生。拉致されたのが偶然めぐみさんだっただけで、もしかしたら自分だったかもしれない。そしてこの先、自分の身にも起こるかもしれない。そう思うと、何事もなく家に帰れて過ごせている事が奇跡なんだと、今自分達が何気なく過ごしている一日一日は、誰かがどこかで強く求めているものだと気づいた。自分の身に起きて欲しくないことが当時同じ中学生だった横田めぐみさんに起きている。無関心でいられるはずがない。他人事だと思い流せるはずがない。拉致問題の恐しさと、四十五年未解決の重さをまず自分に発信し続けた。忘れまいと。風化させてたまるかと。私は、夏休みにめぐみさんに関する報道写真集に目を通した。そこには数多くの横田家の家族写真が載せられていて写真を通し、横田家がいかに笑顔の絶えない幸せな家族だったかが分かり長年引き裂いた拉致の恐しさと憤りで顔が歪む。北朝鮮が提供した拉致直後とみられるめぐみさんの写真を見つけ、私はそこから目が離せずずっと見ていた。その表情には私達が味わったことのない様々な思いが詰まって見えた。「なんで助けてくれないの?」と問いかけているようだった。胸が痛み、やるせない気持ち一杯になった。早紀江さんと滋さん二人が写っている写真も沢山あった。一枚一枚のどの写真からも親の強い意志というものが感じられた。いのちの授業という本には実際に横田さんご夫妻が私の通う学校に来て講演してくださった様子や会話内容が記されていた。合計で四回も来てくださっていると聞いた。「ただいま」「おかえり」という親子のたわいもない会話の大切さ、ありがたさや娘の生死すらも分からないなか生存を信じ、運動し続ける親の覚悟。親の愛情の無限たる深さに多くの人が涙を流してきたかと思う。なぜなら私もその一人だからだ。わが子の生存を信じ切るその凛とした姿に自分も横田さんご夫妻のような親になると決意している。残念ながらご夫妻の講演会に参加した事はないが、めぐみさんの弟である拓也さんの講演会には一度参加しており、当時私は中学一年生だった。拓也さんの〝生の訴え〟は私だけではなくその場にいた人達の心に真っ直ぐ響いた。全ての言葉に命の深さや生の意味がある思いで聞き入っていた。このような貴重な時間、体験をさせて頂いた事を無駄にせず目にした事、耳にした事を多くの方に自分の言葉でこれからも伝えていき、小さな事でもできる事は手を尽くしていきたい。愛に冷え切ったこの世界を変えられる力が私達中学生にあると私は思っている。

入賞者のコメント

こうやって文を書くのは、これが私の発信方法の一つであり、自分自身への忠告でもあるから。見せかけの平和から本物の平和を取り戻すため私は手を止めない。

特別賞

今を大切に

山梨県北杜市立甲陵中学校二年
金子 由紅

学校でアニメ「めぐみ」を見た。拉致問題について知っていることもあったが、そこまで詳しくはなかったのだと感じた。そして、見た後は悲しさや悔しさなどが入り交じり、とても複雑な感情になった。このアニメのことを家に帰ってから家族に話すと、拉致問題について色々話してくれた。

まず、「ブルーリボンバッジ」というものがあるということだ。このバッジは、「ブルーリボン運動」という活動の中でつけているものだ。これには「拉致被害者の生存と救出を信じる意思表示」の意味があるそうで、なぜリボンが青なのかというと、日本と北朝鮮の間にある日本海の青と、拉致被害者の方とそのご家族を唯一結ぶ空の青という二つの意味が込められているからだそうだ。このバッジは国会議員の方などがつけられていて、ニュース番組の映像で目にすることは多かった。だが、そのバッジにこのような意味があったことは正直知らなかった。

さらにもう一つ話してくれたのは、当時のニュースを見ていた人たちが今、だいたい中高生の親世代くらいまでになっている、ということだ。私の親がこのように話してくれているのも、実際にニュースを見ていたからだ。だが、これから先、当時を知る人は少しずつ減っていく。

この話を聞いて、私は考えたことがある。まず一つは、ブルーリボンバッジのことも含め「知る」ことが大切だということ。「北朝鮮の拉致問題」と聞くと、私は「軽々しく触れてはいけない問題だ」と感じる。実際、これも事実だと思うが、その気持ちの奥底には「わからないこともあるから」と自ら一歩ひいているところもあると思う。だが、わからないことがあるからこそ「知る」ということが大事になってくるのではないだろうか。そうすることによって、この問題について、今のような気持ちにならずにもっと深く考えることができるようになると思う。

二つ目は、今が重要だということだ。前にも書いた通り、この拉致問題について、当時実際にニュースを見ていて、今それを覚えている人はおそらく中高生の親の世代くらいまでである。当時を知る人は少しずつ減ってくる。なので、今自分たちにとって一番身近な存在である親がこの問題を知っているということが大事になってくると思う。これは拉致問題について、日常でも知ることができるということだ。だからこそ、今私たちがこの問題にしっかり向き合って、はっきりと記憶しておくべきだと感じる。今私たちが、どれだけ拉致問題について知っておくかによって、未来も変わってくると思う。

この日常があることに感謝して、今を大切にして生活していく。そして、この出来事は忘れてはならない。私は、こう思っている。

入賞者のコメント

拉致の実態をどの世代の人たちにも知ってもらい、忘れてはならないこととして全ての人が理解し、解決に向けて進んでいかなければならないと思います。

特別賞

話し合う努力が大事

愛知県名古屋市立瑞穂ヶ丘中学校 三年
勝山 心咲

『めぐみ』というアニメ映画のＤＶＤが、私がよく行く熱田図書館においてあります。私は、小学生の時にこのＤＶＤの存在に気が付きました。

どんな内容か姉に尋ねたところ、「中学校からの帰り道に北朝鮮の人にさらわれて、帰りたいのに日本に帰ってこられない女の子のお話だよ」と聞き、私は一瞬で怖くなり、そのＤＶＤを借りることが出来ませんでした。それからは、ニュースで横田めぐみさんの名前を耳にする度に、図書館にあったＤＶＤの存在を思い出していましたが、「見たら、一人で寝られなくなる」と思い、手に取ることができませんでした。しかし、今年の沖縄全戦没者追悼式で、小学生の女の子が「こわいをしってへいわがわかった」と話すのをテレビで見て、また同じタイミングで学校から「北朝鮮人権侵害問題啓発週間」というチラシをもらい、『めぐみ』を見てみよう、北朝鮮の拉致問題を知ってみようと思うようになりました。

北朝鮮は、二十年も前に日本人拉致を認め五名の人は返してくれたのに、その他の何名もの人を「死んだ」等と言って、日本へ返してくれません。北朝鮮にとって都合の悪い存在は日本に返してもらえないのです。ひどいです。

その人達を返してもらうにはどうしたらいいのか私なりに考えました。まず、自分のことを忘れられたら、投げやりな気持ちになり、生きる気力が無くなってしまうと思うので、めぐみさん達には「絶対に帰れる」という希望を絶やさないで居て欲しいと思います。日本で自分の帰りを待っている人達が居るということがわかれば、望みを捨てないで頑張る活力につなげていくことが出来ると思うので、私達は、ねばり強く「返して」と言い続け、その声を大きく、めぐみさん達の耳に届くようあらゆる手をつくしたいと思います。

ただ、拉致が判明してから二十年の間に、日本が言い続けてきた「返せ」の言葉だけでは、北朝鮮は返してくれないということもわかりました。私の日常でもよくあることですが、自分の希望を叶えたい時は、自分一人だけで言うのでは無く、友達の力を借りて、その人に近い存在の多人数で伝えると希望が叶いやすいと思います。日本だけでは聞き入れてもらえないのなら、韓国や中国、ロシアなど、北朝鮮の周りにある全ての国で声を合わせて「返せ」と北朝鮮に伝えたら効果がでるのではないかと思います。

私がニュースで知る限りでは、この三つの国と日本はあまり良好な関係とはいえないです。ですが、「拉致問題については、その他の複雑な問題と一緒にしないで、協力し合おう」と話し合いを何度もくじけずに行えば、力を合わせて「返せ」と伝えられる関係がこの三つの国々と築けるのではないかと考えます。

入賞者のコメント

北朝鮮による拉致問題についてもっと多くの人々に関心をもってもらうために、私に出来ることを考え、今回の作文を書くことにしました。

高校生部門

最優秀賞

一人ひとりの人権

関西創価高等学校 三年
松本 優心

家族皆で仲良く暮らしていた横田家。当たり前だった日常がある日突然奪われた。その日から時計の針は止まったままだ。

私はこれまで、もちろん拉致をすることは絶対に許されないことであるし、拉致被害者の当時の心境を考えると想像もできないくらい怖く孤独な思いをしたのだろうと思ってきた。また、大切な家族を失った拉致被害者家族の気持ちを考えると一日でも早く帰ってきてほしいと思うのは当然だと思ってきた。しかしその反面、長年北朝鮮にいると北朝鮮での人間関係もできるはずなので、拉致被害者は日本に戻ることを本当に幸せと感じるのだろうかとどこか疑問に思う気持ちもあった。

しかし、拉致問題について学んで私の考えは変わっていった。アニメを視聴したり、資料を読んでいく中で、恥ずかしながら私はどれだけ拉致問題のことを知らなかったのかを痛感した。特に北朝鮮で工作員の教育係として働かされていた事実はとても衝撃的だった。自分の大切な家族が犯罪に手を貸すことをさせられている。それを知ったご家族はどんなに辛い思いをしただろうか。また、私は奇跡的に帰国することができた蓮池さんのインタビュー記事を読んだのだが、そこには、「北朝鮮で持てた自由は考える自由だけ」「『本音と建前』を区別して発言することが北朝鮮での保身術」とあった。人権の二文字を全く無視した国だと改めて思った。これらの事実を知り、ご家族が帰国を望まれることはもちろん、拉致被害者も日本が恋しく、日本のような人権の保証されている国に行きたいはずだと考えが変わった。

私と同じように「北朝鮮に日本人が拉致されて、ご家族や政府が拉致被害者の帰国に向けて活動している」という表面上だけを知って、分かった気になっている人がたくさんいるのではないかと思った。もちろんこの事実自体を知ってもらうことはとても大切だ。知らなかったら何も始まらない。しかし、それだけでは何の解決にもならない。拉致という国家犯罪が行われていて、その被害は様々な国にあること、一人ひとりの尊い生活が突然奪われ人権のない暮らしを強いられたことをよく理解し、世界の問題として、人が生きていく上で欠かすことのできない人権を脅かす事態であることを強く認識する必要がある。何十年後かには拉致被害者やそのご家族が亡くなってしまう日が来る。しかし、その日が来たとしてもこのことは過去に起きたこととして時効にしては絶対にいけない。拉致被害者やご家族が感じた孤独、寂しさ、苦しさ、怒り、望みといった感情を私たちが受け継ぐ必要がある。そして、行動として社会で示していかなければならない。一人ひとりの人権を守るために。

入賞者のコメント

拉致被害者やご家族の様々な感情を想像し、寄り添っていくことを心掛けました。拉致問題について若者が発信していくことに大きな意味があると思います。

優秀賞

「忘れてはいけない」

福島県立福島明成高等学校 三年
佐藤 陽和

あまりにも急な出来事、ただただ普通の生活を送りたかったであろう。私には考えられないような苦しみ、怒り、悲しみが沢山あったに違いありません。今でも「お母さん」と叫ぶ声、両親がめぐみさんを思う気持ちが強く印象に残っています。もしも、家族と離れ離れになったら、大切な人と会えなくなったら、私は本当にその世界に生きる意味なんてあるのでしょうか。考えるだけでも頭が痛くなり、胸が苦しくなります。

私たちには必ず誰にでも一人は大切な人がいます。今はまだ気づかない人もいるかも知れませんが、心を支えてくれている人がいるはずです。どんな理由があろうとも、その人を無理やり奪う行為は決して許されるものではありません。それは、全世界どんな人でも同じだと思います。

私は自分なりに何ができるかを考えるようになりました。高校生として授業で取り上げられるまでは、「北朝鮮の拉致問題」は漠然とした響きしか頭にはありませんでしたが、この事件が起きた原因や朝鮮半島の二つの国と日本との関わりを詳しく知り、「めぐみ」というアニメを見ることで、高校生になったからこそ理解できた部分が沢山ありました。私のように、横田めぐみさんの名前は聞いたことはあるが、拉致事件についてよく知らないという若者は時代と共に増えてきているのではないのでしょうか。実際に、私の両親は拉致事件をよく知っていましたが、一歳年下の妹と七歳下の妹の二人は、あまり知らないと言っていました。このことから私は、幼い子供たちでも分かるように拉致問題をわかりやすくまとめて、様々な高校生としての活動の場面で広めていくことが大切なのではないかと思いました。

そのためにはまず、私たち高校生がしっかりと理解し、「めぐみ」のビデオを通して多くの人と繋がり、一人でも多くの人に知ってもらえるように活動していきたいと思います。インターネットで調べてみると署名活動の他に、ブルーリボン運動があるということを知りました。今私は自分の高校の生徒会の一員として、福島の高校生として東日本大震災の風評被害払拭のために「シトラスリボン運動」を実施しています。他校との交流がある際には必ず胸に付けて参加すると他校生からは、「そのリボンかわいいね。何んのリボン?」とよく聞かれます。意味を説明すると、みんな自分の高校でもやってみたいとその趣旨を賛同してくれます。私はシトラスリボン運動に加えブルーリボン運動に取り組み、近隣の小学校、中学校、そして高等学校にも広げ、北朝鮮の拉致事件について知ってもらうきっかけとし、様々な多くの人たちの繋がりが大きな力となって北朝鮮に届くことを願っています。

入賞者のコメント

当たり前の日常を奪われる悲しみは計りしれない。誰であろうが決して奪ってはいけないことを一人一人がしっかりと理解していくことが大切だと思う。

優秀賞

関心をもつことが第一歩

神奈川県立厚木東高等学校　一年
中川　茜莉

拉致問題って何なんだろう。度々ニュースで取り上げられる拉致問題について。私は深く考えることなく聞き流してしまっていた。私が生まれる前に起こった事件なために身近に思うことは出来なかったのだ。他人事、アニメ「めぐみ」を見るまではそう思っていた。

アニメ「めぐみ」を視聴した時、もし自分がと考えると恐ろしさと苦しさで胸が締め付けられるような思いになった。四十五年前、横田めぐみさんは十三歳という若さで北朝鮮に拉致された。青春真っ盛りのときに自由を奪われ、家族から引き裂かれたのである。アニメのシーンにあった船内に響くお父さんとお母さんを呼ぶめぐみさんの声が印象に残っている。それはフィクションだと思いたいほど辛い現実だった。いきなり大好きな人達のそばから離され、知らない人に知らない場所へ連れてかれる、怖くて怖くて仕方がなかったと思う。そしてなによりめぐみさんを奪われたご家族がどれだけ苦しい思いをしてきたのかが分かり、自分の無知さに気づいた。突然にして最愛の娘が姿を消した。考えたくない、信じたくない現実だったと思う。その当時、めぐみさんに何が起こっているのか分からない状況も辛かったであろうし、拉致されているかもという情報がもたらされた時は信じ難く、助けに行くことは出来ないやるせない気持ちだったと思う。娘が戻ってくるのなら何でもする、そういう思いだったと考える。

マンガ「母が拉致された時僕はまだ一歳だった」を読んで、被害者家族は「めぐみ」とまた違った思いがあると感じた。めぐみさんと同じく拉致された被害者だが、事件に関わった人物を教育していた。大人になって自分の母親が拉致されたという事実を知り、複雑な思いだったと思う。めぐみさんのご家族は世間に呼びかけていたが、母が拉致されてしまった耕一郎さんは簡単に公の場に出られなかったことは悔しかったのではないかと思った。

これらのアニメやマンガを見た後、なぜ、未だに拉致問題が解決しないのか?という疑問が浮かんだ。それほど北朝鮮という国との交渉が難しいのだろうか。

私は、拉致問題解決は自分たちから遠いところにある気がして正直何をすれば良いのか分からない。だが、まずは拉致問題について知ることから始めるのが重要だと考える。拉致問題への一人一人の関心こそが何かに繋がるのではないだろうか。そして、被害者家族が高齢化していく中でこの拉致問題が薄れていかないように、この事実を忘れず後世にも伝えていくべきである。

入賞者のコメント

この作文を通して自分なりに拉致問題について考え、被害者とそのご家族の気持ちに着目して作文しました。作文を読んで頂いた方にも、これをきっかけに拉致問題について少しでも関心を持って貰えたら嬉しいです。

特別賞

自分事としての「出会い」

敬愛学園高等学校　一年
生井澤　龍青

朝六時半起床。朝食を摂り身支度を済ませて学校へ急ぐ。友人と他愛ない話をしたり、部活動や勉学に励んだり、これが私の日常である。この日常は「常に在り続けるもの」と私は確信していた。弁論部の活動の一環として「アニメ　めぐみ」という映画を視聴するまでは。この弁論部の夏の活動をきっかけに私の考えは大きく変化した。映画が終わりエンドロールが流れても全身の震えが止まらなかった。例えようのない怒りが私の全身を駆け抜けていた。二〇二二年の現在においても解決に導けていない北朝鮮による日本人拉致問題。被害者のみならず、家族・親族の方々の日常も一瞬で崩壊したのである。そして私の中の日常や常識も三六〇度変化した。

今までの私は拉致問題を歴史の授業やニュースで得た知識のみで判断し、その背景や経緯を深く考えたり問題視する態度には至っていなかった。震えるほどの怒りは「他人事」としての視点しか持ち得なかった私の姿勢にも起因していることに気づいたのである。しかし、それは私一人に言えることではなく大多数の人たちに言えるのではないだろうか。

自分の姿勢の誤りに気づいた私はちょうどその頃弁論部の卒業生の先輩と話をする機会を得た。その先輩は「北朝鮮から留学生を日本に招くべきだ」と語り、これはその時まで有効な解決案を見出せなかった私の意表を突く案であった。この北朝鮮の若者を留学生として受け入れるという方策は、この出口への方向性すら見えない日本人拉致問題に一つの方向性を与えるのではないかと私に感じさせたのである。

北朝鮮の若者に新しい「出合い」の場を提供することは彼らの考え方に正しい知識のみならず普遍性や全体を俯瞰して考える芽を与えるのではないか、教育とはそうした大きな力を持っているのではないか。弁論部に所属する私は自分の主張を多くの聴衆に発表する機会を与えられている。今はその機会を有効に活用したいと考えている。また、将来大学に進学した時は「日本人拉致問題」に関するサークルを立ち上げて、多くの国の若者たちを招いてディスカッションする機会やスピーチをする機会を持ちたいと考えている。そしてその動画を国連に送り、国連会議の場で世界中に訴えていきたい。

この根深い「日本人拉致問題」の根本的解決とは即座に解決する事ではない。もちろん即時解決できればそれに越したことはない。しかし、それができないから現在まで未解決のままなのである。拉致された人々にとって「最悪の出会い」に少しでも小さな突破口を開けていくことこそが今求められていると私は思う。そのために、「自分事」として私は闘っていくつもりだ。

入賞者のコメント

数多くの作品の中から私の作品を選んで頂き、光栄に思います。誠にありがとうございます。この問題は「忘れず、動く」必要があります。私はこの機会を糧に、更に考え動きたいと思います。

特別賞

北朝鮮拉致問題について

尽誠学園高等学校 一年
真鍋 輝也

僕は、今回勉強した拉致問題のことは、あったことを知っているだけで、詳しくは知りませんでした。その状態で、今回「めぐみ」を見て、最初に悔しいという気持ちが込み上げてきました。それは、事件を風化させないためにめぐみさんのお母さんとお父さんなどがチラシ配りや署名活動をしている時に通行人が見向きもしなかったことです。それでなくても、北朝鮮という一つの国を敵にまわして戦っていて、日本人みんなで戦おうとしていたのに、その味方であるはずの日本人までもが敵にまわっていて本当に苦しかったと思います。その時自分がいればと思いましたが、本当に自分がその場面に立ち会った時、署名できるかと聞かれたら即答で「はい」とは言えないかもしれないと思いました。それに、北朝鮮はめぐみさんの安否すらもあやふやにしていて、他人である僕でさえすごく悔しかったです。

今回の事件は、本当に人権が侵害されていると思いました。人権とは人が幸せに生きる権利であって、めぐみさんにとってそれは、十三年程しか守られませんでした。ですが、前に拉致された人達は北朝鮮で結婚して幸せに生きていると聞いたことがあります。確かに配偶者の方に罪はありません。ですが、本当に幸せかと聞かれると僕は疑問を抱きます。それは、彼女達が自らその国に足を運び、好きな人と結び付いたという訳ではないからです。一人ひとりが自由に自分の幸せを掴むことが人権なのではないかと思いました。

僕は、人権という言葉が出てきた時、世界人権宣言のことを思い出しました。そして、その年代などを調べていたらすごく驚きました。それは、世界で人権をもっと大切にしていこうという宣言の後であの国境を超えた拉致事件が起きたということを知ったからです。その宣言が出された時に北朝鮮は国連に入っていませんでした。でも、後から加盟した時にでも、日本人などの拉致被害者を解放すべきです。ですが、今解放したところで、もう二度とめぐみさんと滋さんは会うことができないことがすごく悔しいです。

今、僕にできることと言えば、この事件の風化を防ぎ、もう二度とこのような事件を起こさないようにすることぐらいです。クラスでこの事件を知っている人と聞かれて手を上げた人は半分もいませんでした。でも、これは無関心だからではないと思います。単純にこのような事件のことに触れたり、聞いたりする機会が無いからだと思いました。横田めぐみさん拉致から四十五年。当時を知る人も多くいると思います。その人達がもっと若い世代に伝えないとこの事件は風化するでしょう。僕はまず、署名活動に対して即答で「はい」と言える人になります。

入賞者のコメント

この問題に対して、知らない人はまだまだたくさんいるはずです。この事実を多くの人に知ってもらい、過去のこととせず後世へ伝えてほしいです。

特別賞

拉致問題について

愛媛県立松山商業高等学校 二年
野中 こころ

私が生まれる三十年程前、十七人の日本人が次々と失踪した。拉致の方法は様々で帰宅途中やデート中だった人もいるという。もし自分の身内の人が突然姿を消し帰ってこないという状況を想像するだけでもとても辛い。私はこの作文を書くにあたって弟が拉致被害にあった蓮池透さんの本や娘が拉致被害にあった横田早紀江さんの本を読んだ。そこには今まで全く知らなかった拉致問題の真実や身内の人間としての心境が書かれてあった。書かれてあることを自分に置き換えて読むと恐しくてたまらなくなった。

二〇〇二年九月、金正日が拉致を認めて謝罪をした。その時横田めぐみさんは死亡と伝えられたという。しかし、遺骨からは別の人のDNAが検出されたため事実ではなかったということが判明する。生死も分からないまま待ち続けることさえ心を痛め、重くするにも関わらず誤った情報で拉致被害者を希望や絶望で振り回す北朝鮮側の人間を許せない。とても腹立たしい気持ちになる。しかし、拉致問題と直接関係のない在日朝鮮人への対応の仕方も考えるべきだと早紀江さんは述べていた。北朝鮮の人が皆悪い訳ではないということをしっかりと理解しなければいけない。また、その他にも考えさせられる内容が沢山あった。早紀江さんは、北朝鮮の村を見た時思わず「めぐみちゃーん！」と叫んでしまったそうだ。返事がないと分かっていても、色々な思いが込み上げて出た叫びだと思う。返事がなかったことで辛い現実を突きつけられたり、それに対しての無力さを感じたりしたのではないかと思った。めぐみさんがもし今も日本に居たらもっと違う生活ができていたのだろうと思う。いくら悔やんでも娘が帰ってこない横田夫妻の気持ちや、中学生という若い時から拉致をされた横田めぐみさんの気持ちを考えると胸が張り裂けそうになる。だが、「共感する」という言葉は違う気がするのである。拉致被害者の方にしか分からない感情があると思うからだ。今回拉致問題について学んで、拉致被害者の方々の気持ちに「共感する」と簡単には言えないと思った。

横田夫妻が署名活動を行った時、世の中の一般の人たちは拉致問題に対して無関心で他人事のようだったという。また、テレビ局やマスコミの人も最近は若い記者など気楽な感じで話す人が多いらしい。これから拉致問題がどうなるか分からないという不安も述べていた。そこで私はまず、身近な人に拉致問題について話して知識を増やしたり理解を深めたりすることが必要だと思った。一人一人がこの問題について考え、少しでも解決に近づけるような社会になると良いと思う。そして今でも拉致問題で苦しむ人がいることを忘れず解決に向かって活動を続けていくべきだ。

入賞者のコメント

拉致問題という言葉を知っていても、その先を知っている人は少ないと思います。この作文を通して一人でも多くの人に拉致問題の実態を知ってほしいです。

英語エッセイ部門

最優秀賞 What we should do now?

Takeuchi Mayu
11th grade, Saijo High School

Remember a happy birthday party you've enjoyed with your family. Now, imagine that you'll never see your family again the day after that. This is exactly what Yokota Megumi's family experienced. 45 years have passed since she was abducted by North Korean agents. According to a public opinion poll carried out by the Cabinet Office in 2017, 85.3% of people in their sixties remained interested in the abduction issue, compared to only 64.9% of young people. What should we teenagers do to solve the international issue? I believe we should do two things: develop our knowledge of the issue and take action.

First, we must improve our knowledge. When I initially learned about the abduction issue in junior high school, I realized what a gross violation of human rights Megumi's family had suffered. It opened my eyes to the injustice. Since then, I've always asked myself what I can do to resolve this issue. Before writing this essay, I watched the Japanese animation MEGUMI. There was a scene that left a deep impression on me. Shigeru, Megumi's father was given a comb as a birthday present by Megumi on the day before the incident. For 42 years, Shigeru had always carried the gift in his breast pocket. At his funeral, Sakie, Megumi's mother, did not put the comb in Shigeru's coffin. Instead, Sakie decided she would keep hold of it, so if they were ever reunited, Megumi could see that her father had always been thinking of her. I feel strongly that we young people should inherit the determination of Mr. and Mrs. Yokota. We need more opportunities to learn about these struggles.

Second, we must take actions ourselves. So far, I have always shared what I learned in class with my family. My mother says that she remembers our talk about the abduction issue. It's so important to share our opinions with those around us and get them interested in human rights issues. Currently I'm a member of a committee on human rights education. I hope to hold activities to educate the public during North Korean Human Rights Abuses Awareness Week. I want to tell all the students at school about some events, which are available on YouTube. Fortunately, after reading my ideas, my teacher promoted my action and introduced the anime of MEGUMI in the school newsletter for students and parents. I'm sure that expressing our opinions will inspire others to take action, too.

In conclusion, this essay outlines two steps all young people can take: develop our knowledge of the issue and take action. The most important thing in learning about human right issues is to never give up. I want to increase opportunities for young people to learn by continuing to enlighten them. Moreover, I hope they themselves will spread the knowledge they have learned. For this reason, I want to be a leader who can constantly push myself to learn more. I'll continue to research the abduction issue and strive for a resolution.

入賞者のコメント

拉致問題は決して諦めてはならない重大な問題です。私はこれからも学び続け、今できる努力をしていきます。

優秀賞 Familiar Problems

Shirahama Masaaki
9th grade, Anan Municipal Fukui Junior High School

After I watched the Megumi video, I was curious why North Korea was abducting people and what was happening to the people who were not returning. Thus, I researched it.
It turns out that the abductions conducted by North Korea were for the purpose of using Japanese people to train operatives and subjugate South Korea to the North's view of "unity" in the Korean Peninsula.

The video had an impressive scene featuring a figure of a person walking over a leaflet without even paying attention to it. It was shocking to those who sincerely hoped for Megumi return to Japan and believed in their campaign. However, not only had their papers been carelessly trampled, but it was as if their own hearts had been crushed as well. It felt as though Japan was not even interested in the abduction issue taking place … and that was a huge problem. In order to solve important human rights issue, there must be general interest and concern regarding those matters.

When I was in elementary school, I read a book written by Dr. King from the United States. He confronted racism not with violence, but with protest. He appealed to many about the absurdities of discrimination. Perhaps no better phrase captures his perspective than this particular one: "We remember the silence of our friends, not the words of our enemies." It is a reminder that those who remain silent and overlook the suffering of others quietly stand with those who discriminate. I think that it's very easy to avoid personal responsibility in situations like these because the problems often seem so large. It's simple to just assure ourselves that we are completely powerless. However, this mindset only further torments victims and their families, as well as hinders any real progress towards ending such heinous abduction crimes.

In order to resolve the abduction issue, we must first be willing acknowledge the reality of its existence. We can't solve a problem if we simply keep stepping over it. Additionally, we must also be able to imagine what kind of days Megumi, her parents, other victims, and their families have faced. We must work together and make great efforts to resolve this heartbreaking issue as soon as possible.

入賞者のコメント

拉致問題が早く解決出来たら良いなという願いを込めて書きました。拉致被害をなくして、みんなが幸せに、安心して暮らせる世の中になると良いです。

優秀賞 Now, it is our turn

Murayama Kaho
10th grade, Takeda Junior & Senior High School

"Mom! Mom!" In the pitch-dark, cold boat, Megumi Yokota cried and screamed for 40 hours, scratching here and there in doorways and walls, and when she arrived in North Korea, her fingernails were almost peeled off and she was covered in blood.
From the day she disappeared, her family's life changed forever. At night, her father cried in the bath and her mother cried alone away from the family.

Could you bear it if your happiness is suddenly destroyed?
Could you bear it if your loved one suddenly disappear in this way?

I want you to take some time to think about this. If your sibling disappears without any trace, no one had contact with you for ransom. You can't anything but wait for your sibling will come back. If I were in the situation, I wouldn't know what to do. And I would feel hopeless to live.
Such as inhumane incident actually happened in Japan.
17 Japanese people, including Yokota Megumi, were abducted by North Korea. They abducted people not only from Japan but also from several other countries and regions of the world. My heart ache this unforgivable state- sponsored incident.
The perposes of the abduction were both the spy-training and the Japanese instruction for the agents. North Korea acknowledged the abduction at the first Japan-North Korea summit and it was even after 25 years later after Megumi's abduction had occurred. It took so many years that this tragedy was shown to the public.

The incident has not yet been resolved, and unfortunately due to aging, some family members have passed away without ever seeing their abductees. What can we do achieve this? Japanese school should dedicate a time to think about this abduction issue. Actually there is a special week "North Korean Human Rights Abuses Awareness Week" in Japan, but in reallity few people, especially younger generation know this week. How about providing a study time on the abduction issue at each school once a year, such as peace studies? We should start with learning the background of North Korea why they had abducted, including history. We also must ask the Japanese government to share the latest information.
The abduction issue must never happen again, and we younger generation, must not give up and stand up for a solution.

入賞者のコメント

これからは私たち若い世代が拉致問題の最終的な解決に向けて動き出さなければなりません。この作文を通じて、日本だけでなく世界中にこの問題の重大さを知ってほしいと思います。

この作品集は令和4年、政府拉致問題対策本部の主催により実施された
「北朝鮮人権侵害問題啓発週間作文コンクール2022」応募作品の中から
入賞作品を収録したものです。
文中の表現や表記は、原則として応募時の表記に従いました。

北朝鮮人権侵害問題啓発週間作文コンクール2022 入賞作品集

令和5年1月発行

【発 行】政府拉致問題対策本部
〒100-8968 東京都千代田区永田町1-6-1　TEL:03-3581-8898
https://www.rachi.go.jp

令和５年１月発行